

『伊勢物語』 解釈私論

——百一段の解釈をめぐって——

土 屋 博 映

『伊勢物語』の百一段は、藤原氏と在原氏の葛藤を含むものとして、問題のある一段であり、また表面でも少なからず不明な点が存在する。まず百一段を全掲する。

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありとききて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじし給ふとききて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなん、

咲く花のしたにかくる人を多み

ありしにまさる藤のかげかも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花の盛り

にみまそがりて、藤氏のことには栄ゆるを思ひてよめる」となんいひける。皆人、そしらずなりにけり。

(本文は、日本古典文学大系によつた。ただし、旧字体など、一部表記に筆者が手を加えている)

さて、本段の内容をまとめると、次のごとくである。

業平の兄の行平が、藤原の良近を家にまねいてもてなした。

そこに顔を出した業平は、無理矢理和歌を詠まされ、その時に詠んだのが、「咲く花の……」であった。

しかしこの和歌は含みが多く、人々の誤解をまねくようなもので、業平自身の説明が必要であった。

以上がまとめであるが、業平は藤原氏にあてこすりをし、わざと誤解されるような和歌を詠んだという説もあり、はなはだ興味をひかれる内容なのだが、本稿ではそれにはふれない。

ところで、本段で、とりあげ、考察を加えてみたいのは、冒頭の二

文である。冒頭の二文を再掲する。

(1) むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。

(2) その人の家によき酒ありとききて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける。

『伊勢物語』の冒頭の基本形式は、「昔、男ありけり」である。まづ「男」ことが在原業平の話であることを示すのであるが、(1)に見られるように、本段の場合、冒頭の表現が少々異なっている。「むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。」と、業平の兄の「行平」のことからはじまるのである。

これも疑問の一つにはなるが、『伊勢物語』では、業平以外の人物で話がはじまることは他にもないことはないもので、これについても本稿ではとりあげて論じることはしない。

解釈上、注目すべき要素を含むのは、その次の(2)の一文である。再々掲する。

(2) その人の家によき酒ありとききて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける。

この部分について、古典文学大系(岩波書店刊)と古典文学全集(小学館刊)から、重だつた注をとりあげてみる。

一八よき酒||清酒をさすか。

一九うへにありける||清涼殿の殿上の間に仕えていた。

二〇左中弁||左右大中小の別があり、八省を分掌して文書の受付や国司の召集などを司る官。

三藤原の良近||藤原不比等―宗合―蔵麻呂―総繼―吉野―良近。貞観十六年(八四七)左中弁。史実では行平が左兵衛督の時は左少弁だった。

三まらうどざね||正客として。「ざね」は主となるものをさす。「ききて」の主語は、客の人々、「うへに」以下の主語は行平に転じたのであろう。「ききて」の次に「人々飲まんとてきたりけり」と補う説もある。

三三あるじまうけしたりける||御馳走をした。

(以上、古典文学大系による)

三聞きて||人々が聞いて。「よき酒あり」との評判を聞いて殿上人たちが行平の家に行き、行平は宴を開いたのであろう。

四左中弁藤原の良近||「左中弁」は、太政官の左弁官局の中弁。大弁の下、少弁の上である。太政官内八省の庶政にあずかり、詔勅を起草する。藤原良近(八二三―八七五)は吉野の子。貞観十二(八

七〇) 年右中弁、十六(八七四)年左中弁になった。行平が左兵衛督であったのは、貞観六年(十四年)の間である。

五まらうどぎね||「ぎね」は、主となるものを表わす。「まらうど」つまり客の主たるもの

(以上、古典文学全集による)

以上、参照本文の代表としての、古典文学大系と、古典文学全集の双方の注を掲げてみたが、この注を参考にしつつ、本稿で論じたいのは、次のような点についてである。

- 一 「その人の家によき酒ありとききて、」の、「ききて、」の主語は、一体誰なのか。
- 二 「うへにありける」の主語は誰なのか、また、どうしてこのような表現が必要とされたのか。
- 三 「その日は」という表現は、どうして記されなければならなかったのか。

以上三点が、解釈上疑問の残るところであり、本稿で論じてみたいものである。

さて、我々——少なくとも本稿筆者にとって——には、この一文は、実は注を加えてもはなはだわかりにくいものとなっているのである。

このようにわかりにくい場合、誤りだとか、悪文だとか決めつけてしまえば、事は容易だが、我々のとるべき態度としては、与えられた文章に関しては、まずその与えられたままで読みとれるかどうか、出

来うるだけのことをなし、その上で文章の可否についての結論を出さなければならぬのである。

そこで、ないうることの一つとして、注をとりあげてみたのであるが、疑問を解明しうる注として、大系本(古典文学大系のこと、以下「大系本」とよぶ)では、

「ききて」の主語は、客の人々、「うへに」以下の主語は行平に転じたのであろう。「ききて」の次に「人々飲まんとてきたりけり」と補う説もある。

とあり、全集本(古典文学全集のこと、以下「全集本」とよぶ)では、人々が聞いて。「よき酒あり」との評判を聞いて殿上人たちが行平の家に行き、行平は宴を開いたのであろう。

となっている。やはり「ききて」の主語はわかりにくいと考えているようで、両本ともに主語を明確に記している。そして、いずれも「ききて」の主語は「人々」だと判断しているが、はたしてそうとてよいものであろうか。

「その人の家によき酒ありとききて、」には、主語は明示されていないのであるが、これは日本語、就中、古代語にはよく見られる現象であるから、別段不思議なことではない。ただし、主語が記されない

といつても、日本人が好んで文章をわかりにくくしているというわけではない。主語が記されない原理はただ一つ、

記さなくても、文脈上、主語が読みとれる

ということなのである。

しかるに、この「ききて」の主語はどうかというと、その原理のごとくそう容易に判断がつくようには思われない。だからこそ、両本ともに、主語について、注を加えているのである。

ところで、疑問が生じるのは、両本ともに「人々」を主語としているところである。通常、主語が省略される場合は、人物名——その主語にあたる——がそれ以前に一度は記されていることが条件であり、いかに、「人々」という不特定多数を指すものといえど——それは特定の人物よりは省略される可能性が高いとしても——省略はされないことが一般であろう。

両本ともに、頭注という限られたスペースであることも原因となっているのであろうが、ほとんど何の説明も加えずに、主語は「人々」と断定しているのである。

ただし、大系本は、若干気がかりだったと見えて、

「ききて」の主語は、客の人々、「うへに」以下の主語は行平に転じたのであろう。

とかまた、

「ききて」の次に「人々飲まんとてきたりけり」と補う説もある。

などと記しているのである。

ところで、「ききて」に含まれる接続助詞「て」は、単純に前の表現と後の表現とをつなぐ役割をはたすものであり、原則として「て」の前後の主語は変わらない、そういう接続助詞である。無論、その「て」の役割にも例外がある。しかしそれはあくまでも例外であり、その場合にはその例外となった——主語が「て」の前後で異なる——原因を説明しなくてはならない。それを示すことなく、主語がいかにも簡単に転じてしまうような判断には納得がいかないし、またそうかといって、「人々飲まんとてきたりけり」と補って考えるというのはどのようなものであろうか。

省略語とは、あくまでも省略してもわかりうるから省略するものであり、これは主語の省略とまったく同じ原理である。文章をわかりにくくするための省略語などということはありえないものなのである。

さて、ここで『伊勢物語全評釈』（右文書院刊・竹岡正夫著）を参照してみたい。

まず当該箇所解釈である。

昔、左兵衛督でありました在原の行平という人がありました。その

人の家に、美酒があると聞いて、殿上にいたのが、左中弁藤原の良近というのを正客にして、その日は、饗宴をしたのでありました。(傍点筆者)

これは「ききて」の主語が明確でないし、かつまた「殿上にいたのが」とは、あまりにも曖昧な解釈である。要するに、文章に忠実に読みとろうとすると、主語が不明確になり、かつ前後が照応しなくなるような、そんな文脈なのである。

さて、全評釈(『伊勢物語全評釈』のこと、以下「全評釈」とよぶ)には、「ききて」に対する注がなく、その続く後の部分に対しては注が加えられている。以下、それを掲げる。

ところで、「聞きて」を受ける語句が下にない。そこで、
○「よき酒ありときき、て」此下に詞落たる也。

さらでは、下の「その日は」といへるも、より所なし。こころみにその落たる詞をおぎなはゞ、「よきさけ有りときき、て、うへにありける人人、のまんとてきけり。左中弁云々」などや有けむ。(玉かつま・五「いせ物がたり」をよみていはまほしき事ども一つ二つ)のように補って解されている。

と、本居宣長の『玉勝間』が引用されている。ここで、宣長は二つの点に疑問をなげかけているのである。

一つは、「よき酒ありとききて」の下に省略があるということ、またもう一つは、「その日は」の存在の意味である。

宣長は「ききて」の下の省略は「うへにありける人人、のまんとてきけり。」としている。大系本の補う説というのは、この宣長の説であったことがわかる。

さて、評釈本においては、次のように説明がなされている。

この文脈は次のように解されよう。

「その人の家に」は、直接には下の「良き酒あり」に続くが、さらに下の「あるじまうけしたりける。」にまで続く。

「上」にありける「は、下の「良近」にかかる修飾語ととらず、「上」にありける(人々が)の意に解し、「……まらうどさねにて」の意味上の主語と解す。「……と聞きて上にありける(人々が)。」

「左中弁藤原の良近といふをなむ。まらうとさねにて」は「なむ」が用いられているように、「あるじまうけしたりける」の解説部に相当する。

「その日は」は、宣長も指摘するように、下への続きが理解しがたい。おそらく、「その日は、左中弁藤原の良近といふをなむ。まらうとさねにてあるじまうけしたりける。」のつもりで言われているものであろう。

以上の評釈本の説明にはいささかの疑問が生じるのである。

それは次のような疑問である。

一 「その人の家に」は、「あるじまうけしたりける。」にまではたして続くものなのか。

二 「上にありける」は、「上にありける（人々が）」として、「まらうどぎねにて」の意味上の主語になるのか。

三 「その日は」の説明は、宣長の疑問に答えたことになっているのか。

さて、ここまで、大系本、全集本、評釈本の注・解説を参考にしたことにより、『伊勢物語』百一段の冒頭の部分には、解釈上、相当な問題がひそんでいることと、宣長以来、いまだ確固たる解釈がなされていないことがわかった。

そこで、参照した注や解説、ならびに百一段の冒頭を吟味することにより、『伊勢物語』執筆者の、本来の言わんとする内容に迫ってみたいと思う。

まず冒頭の一文を再々掲する。

(1) むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。

この一文は、『伊勢物語』の「昔、男ありけり」ではじまるという原則に反するものである。しかし、「男」イコール「業平」ではない書き出しは他にも存在するのである。したがって、この段の冒頭の一文がとくに異常というのではない。

次に問題の第二文である。再々掲する。

(2) 1 その人の家によき酒ありとききて、

ここで、「その人」とは、一体誰なのか。これは指示語の「その」があるのであるから、(1)の「在原の行平」を指すことに、異論はないはずである。

では「よき酒ありとききて」の「ききて」の主語は、一体誰なのか。一体誰なのかといっても、登場人物から、「在原の行平」が除外されることは、内容から当然である。ではそれ以外の誰が、と考えたところで、「人々」という案がうかんでくるわけである。

しかし、既述のごとく、「人々」であれ何であれ、主語を省略するには、その主語にあたる人物が、既に登場人物となっていて、その人物であることが自明であるという大前提がなければならぬはずである。

そこからかんがみれば、「ききて」の主語は自明であった——少なくとも『伊勢物語』の執筆者にとって——はずである。

さらに続く表現に注目してみよう。

(2) 2 うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、

この部分の、「うへにありける」とは、一体誰なのかという点について考えてみたい。

「うへ」というのは、大系本の注にあるごとく、「清涼殿の殿上の間」ということであろう。官位について考えてみるに、左兵衛督が、左中弁よりも位が下とは考えにくい——どちらも正五位下である——であり、位の上下関係とはとらえにくいからである。

ここで、評釈本にあるごとく、

「上にありける」は、下の「良近」にかかる修飾語にとらず、「上にありける（人々が）」の意に解し、「……まらうとさねにて」の意味上の主語と解す。

という説ははたしていかなるものであろうか。そのように考えた場合、助動詞の「ける」は連体形の準体法となるが、このような準体法でも、体言を含む——あるいは省略される——ときには、やはりその体言が自明の場合にのみなされるのである。

(3) 白き鳥のはしとあしと赤き、（『伊勢物語』・八段）

この例文の「の」は、同格の「の」と言われているが、「はしとあしと赤き」の連体形「赤き」の下には「鳥」が隠されていると考えられる。これは既に、同格の「の」の上に「鳥」と記されており、自明

だからこそ省略されるわけであるし、また、

(4) その歌に、「人も訪ひける」とあり、また、「宿のあるじなりけれ」とあめるは。「花こそ」といひたるは、それには同じさまなるに、いかなれば四条大納言のはめでたく、兼久がはわるかるべきぞ。

（『宇治拾遺物語』・一の十）

この例文の「の」や「が」の準体助詞の場合も、前に「歌」とあることから、自明なことなので、「歌」を記す必要がないわけである。

もしも、前後にそういったものが何もなくて省略されるなら、それは、

(5) 見るはよし

などのように、形式名詞「こと」など、前後に存在しなくてもとくに不都合のない場合に限られるのであり、たとえ不特定多数であっても、登場人物としての「人々」が理由もなく省略語として存在するということは難しいと言えよう。

やはりここは「うへにありける左中弁藤原の良近」と、「うへにありける」は「良近」を連体修飾すると見るのが、妥当であり、とすれば「うへにありける」の主語にあたる人物は、その「良近」ということとなるのである。

また、「うへにありける（人々）」が、「まらうどぎねにて」の意味上の主語となるというのは、内容的にもおかしいのではないだろうか。「正客として」もてなすというのならば、それは「行平」以外に考えられないのではないか。

また、「その日は」についても疑問が抱かれる。「その日は、左中弁藤原の良近といふをなむまらうとさねにてあるじまうけしたりける」のつもりで言っているのだろうか。

これでは「その」という指示語の性格などどうでもよいことになってはしまわないか。つまり、そのようなおきかえが可能であるような「その日は」ならば、最初からなければよかったことになりはしないだろうか、ということである。

無論、写本などの関係により、誤記ということもありうるであろう。しかし、誤記などと判定する場合には、あくまでも原文の解釈が、あらゆる角度から、あらゆる可能性を勘案した上で、なされなければならぬと思うのである。したがって、「その日は」は、まず、そこに置かれるべくして置かれていると考えるのである。

さて、以上をふまえた上で、問題となっている部分の解釈にとりくんでみたい。

まず第一に解明されなくてはならないのは、「その人の家によき酒ありとききて」の「ききて」である。この「ききて」の本文が、各本により、どのように記されているかを次に掲げる。

(6) その人の家によき酒ありとききて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、
(大系本)

(7) その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむ、
(全集本)

(8) その人の家に、よきさけありとききて、うへにありける、左中弁ふぢはらのまさちかといふをなむまらうとさねにて、
(評釈本)

注目したのは、いずれも「ききて」などと「ききて」の後に読点がつたれていることである。現代の我々の感覚からいうと、これは至極当然なことである。しかし、それはあくまでも、現代の我々の感覚であり、はたして『伊勢物語』の執筆者まで、我々と同じ感覚であると言えるだろうか。

「ききて」の後の読点が必要なのだろうか、除いて考えられはしないかというのが、拙稿での提案である。

次のような例はどうか。

(9) このわたり近きところに心安くてあかさむ。(『源氏物語』・夕顔)
(10) あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。

(『徒然草』・十九段)

(9)の例は、「心安」い状態で、夜を「あかさむ」というのであり、(10)の例は、「夕顔」が「白く見え」た状態で、「蚊遣火」をたいている

のである。

「て」という接続助詞は、完了の助動詞「つ」の連用形が転じて成したものとみられるが、前後を単純につなぐ気持が強く、自己主張の弱い——「ば」や「ども」などよりも——接続助詞である。そこで、前後の表現により、順接にも逆接にも、もちろん単純接続にもと、さまざまに用いられることになる。

(7)や(8)の例は、「て」をはさんだ前後が、同時に、同じ状態であることを示しているものであるが、これと同様に「ききて、」も考えてみてはどうかというのが、本稿の主張である。

つまり、

(11) ききて、うへにありける

ではなくて、

(12) ききて、うへにありける

と考えるかどうかというのである。

「その人の家によき酒あり」と聞いた時に、殿上の間に同時にいたのが、左中弁藤原の良近と考えるのである。

「その人の家によき酒あり」といったのは他の誰かであるが、これはどうでもよい。そういう噂話を聞いた人物が問題であり、それは他

の誰でもない、「良近」だったのである。その良近がその噂話を聞いたのが、殿上の間であったというわけである。

「ききて」の主語は「良近」、「上にありける」の主語も「良近」なのである。主語が「良近」であれば、自明のことであるから、前に主語を記すこともないわけである。

さて、ここでまた冒頭の一文にもどってみることにする。

「昔、男ありけり。」のように、「男」すなわち「在原業平」が主体となった書き出しでない、本段のような段は他にもある。たとえば、次のごとくである。

(13) むかし、東の五条に、大后宮おはしましける西の対に、すむ人ありけり。

それを、本意にはあらで、心ざしふかかりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。

(第四段)

(14) むかし、紀有常といふ人ありけり。三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。

(第十六段)

(13)(14)いずれも「昔、男ありけり。」の「男」の位置に、それ以外の人間がおかれているわけであるが、結局、(13)(14)ともにその人物による方向性で、以下の文が記されていることに注目したい。

(13)は、「すむ人」を指して、「それを」と目的語として続けていく方向性のパターンで、(14)は、「紀有常」を指して、「(紀有常が)」と、主語として続けていく方向性のパターンである。当然のことであるが、『伊勢物語』のパターンはこの二つしかない。まとめると、次のようになる。

(A) 昔、 ありけり。

がい……

(B) 昔、 ありけり。

ヲ……

このどちらのパターンをとるのかを、本段にあてはめて考えてみると、(B)では意味が通じない。それは続く文に「良近といふを」と目的語が存在するからである。

したがって、本段は、

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。

← (行平は) その人の家によき酒ありとききて……

というパターンと考えられる。

このように、冒頭の(1)文と、続く(2)文の間に「行平は(が)」を補ってみると、無理なく解釈できることがわかる。わかりやすく、(1)と(2)の関係を記せば、次のようになる。

行平は、

←

「その人の家によき酒あり」とききてうへにありける左中弁藤原の良近といふを、なむ、

←

まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。

ここで、「その日は」はどうかというと、別段問題も何もないのである。「その日」が指し示すのは、「その人の家によき酒あり」と聞いた、まさにその日のことなのである。

「良近」は、せわしくも噂を聞いた当日に、「あるじまうけ」をうけたということになる。そうであれば、「行平」も「良近」も「よき酒」ずきであるということになって、その場面のよりあがった雰囲気がかんてくるし、そのもりあがった雰囲気を感じるといふ後の「業平」の和歌の役割もより活き活きとしてこようというものである。

今までの解釈は、「ききて」の主語を誤っていたわけである。それは、現代語の「て」の用法にひかれた誤りであり、「て」を同時の状態を

示すものと考えれば問題はなかったのである。

そして、当然のことながら、「うへにありける」は「良近」の状態であった。

そう考えると、「その日」は、「その人の家によき酒あり」と聞いた当日だということも明確になる。

そこで、その冒頭をまとめて整理すると、

むかし、左兵衛の督なりける在原行平といふありけり。

(行平は)

「その人の家によき酒あり」とききてうへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにてその日はあるじまうけしたりける。

右のようになった。つまり、

Aハ、Bヲ、Cシタ。

という形式に還元できるわけである。

注目すべきは、目的語のBにあたる部分が、

「その人の家によき酒あり」とききてうへにありける左中弁藤原の良近といふ

であって、この目的語の長さに、まどわされたための誤りであったの

である。

(本学教授)

(後記) 本稿は平成二年度国内研修員として、筑波大学に留学した折にまとめたもの一つである。